

農民の生きる権利と環境保全の両立を目指して

青西 靖夫（レコム 代表）

この文章は二〇〇二年二月に日本ラテアメリカ協力ネットワークプロジェクトの調整のためにイサルに行つた際の報告であり、日本ラテアメリカ協力ネットワークの「コーン・スレーター・そんりさ」に寄稿したものである。

昨年一二月にグアテマラ県東部のイサル県リビングストンにおいていくつかの「ミニマ」を訪問してきまし

た。
これは現地の協力団体である「ツク農民・先住民民族全国調整委員会」とともに、昨年十一月に視察を行い、七月から開始したプロジェクトの状況を把握するとともに、これまで訪問してこなかった活動対象「ミニマ」を視察するのが目的であった。（昨年度の報告書については、そんりさ『六十二号』参照のこと）

サン・ホセ・パカヤル訪問

サン・ホセ・パカヤルはまだ生まれればかりのミニマである。いや、まだ生まれつつあるといった方がいいかもしれない。

道から四十分ほど、大農園の放牧地の中をぬかるみに足を取られながら歩いていくと、三メートルほどの川にぶつかった。どうやらその川の向こうに村があるらしい。そのうち、反対側から何人かが掘り抜きのカヌーでやってきた。今にも転覆しそうな不安定なカヌーに乗せてもらい、反対岸にどうやらたどり着く。川縁には様々な大きな木が育っている。

ところが、そこから少し坂道を登ったところで、景色が一変する。切り倒された巨木の切り株の向こうに、地元の椰子で葺かれた家々が作られている。家々の周りには、まだ倒された木々がごろごろと倒れている。そこには、横断幕が飾られている。

「我々の権利のための闘い」 ミニマは、土地運動の真ん中のミニマだったのだ。

人々はこの近郊のチユナクテといつ土地からの移住者であった。以前の村の回りには、もう生

活を支えてい

けるような土

地はなく、二

十代、三十代

の若い世代の

彼らは新しい

土地を求めて、

大農園の一部

を占拠したの

である。ここ

で、しっかりと働

き、森をひら

き、トウモロコシ畑を作りたい。そして子どもたち

にいい土地を残したいのだといつ。三月にこの地

に移り住んできたばかりの彼らは、未来に向けて熱い思いを語ってくれる。



しかし、やはりよそ者である私には、この村の光景は強烈な印象をつづけた。改めて、森を切り開いて生活する」といふことのインパクトの大きさを思い知らされた感じである。村から少し登ったところに作られた耕作地は、屋根葺に必要な椰子の一種を残して、森を切り開き、焼き払って

作られたものだった。この林が二次林であるにせよ本当にこんなことをして大丈夫なのだろうか。コックの土地運動はこれで未来があるのだろうか？農園主が遊休地を森林として残しておく方がまだいいのではないか…などなど

だが、これが彼らの生きる術なのである。彼らはこうして生活してきた。それをちよつと目の前で見せられただけなのだ。今ある大農園を振り返って見ればいいのだ。目の前で森林が切り開かれれば、それはショックな光景かもしれないが、数年前、数十年前に大農園主たちが大々的に森林を伐採し、焼き払い、人々を追い出しながら作ってきたのが、今の風景にすぎないのだ。それを思



い返すことなく、農民の営みに驚いているわけにはいかない。

歴史の中で

この地域に住むのケクチの人々は伝統的に焼き畑移動耕作で生活してきた。林を開き、トウモロコシを作り、何年かするとそこを放棄し、違う場所に移っていく。しかし焼き畑移動耕作が安定的かどうかなどという議論は今の時代のグアテマラには無用のものだろう。十九世紀に始まる「開発」の波の中で、ケクチの人々が生活していた土地はどこもかしこも大農園主のための、所有権「確立」の中で線が引かれ柵が作られ、ケクチの人々は追われるように移動し続けてきたのである。留まることは、自分たちの土地を囲い込んだ大農園の中で「ローノ」として農奴のような生活を選ぶことを意味していた。

こうして「開発」の波は軍政期にもやってくる。ペテン県やイサバル県の土地は軍人たちにほとんど売り払われ、「知らぬ間に」大農園の土地となっていたのである。

そしてほとんどすべてのこうした出来事はケクチの人々の「知らぬ間に」進んでいた。机上

で行われ、それが突然彼らの生活の上に降ってくるのである。政府公報や自治体で公告されようと、それは単に「手続き」にすぎず、そこに住む人々に知らせる目的ではない。政府はその地に住むケクチの人々を知ることもなく、彼らの土地権を認めるでもなく、人々にケクチ語で説明するでもなく、書類の上ですべてが決まっていくのである。文字を使わぬ彼らに、「唯一の公用語」であるスペイン語を操らぬ彼らに、そして隔絶した農村に生活する彼らに、こうした「手続き」は無縁の出来事である。しかしその後にもやってくる現実はい人々の基盤である土地を奪いさるといふ暴力なのである。

しかし、「知らぬ間に」降ってくるのは、それだけではなかった。

「降ってくる」環境保全地区

彼らは言う。前の村は環境NGOのFUNDACION ECOが土地を所有していて、九二年から問題があったのだ。このNGOの名前は「この村」ではなく、今回訪問したこの村でもできてきて、決して好意的には受け入れられていない。

「いったい何が起きているのか？」ここでは、彼らの

出身地のチヨナクテ村に近い、ルベル・カカオ村

(Rubel Cacao)での話をもちに考えてみた。

「ルベルは二十年前くらい前に持ち主がいなくていつか移り住んできました。そして八八年頃から自分たちの土地として登記するために手続きを始めたのです。当時、INTEA(農地改革局)も手続きを支援してくれたのですが、この土地がFUNDACIONでの保護区であるというので手続きは止まってしまうました。そこでこの地域の「コミュニティ」が組織して土地の手続きを進めてきました。このプロセスをCONICは支援してくれたのです。そこで今、FUNDACIONが土地の測量を行い、将来的には「コミュニティ」の土地が登記されるはずだと思っています。」

詳しい背景はまだ調査が必要であるが、環境NGOであるFUNDACIONがこの地域を環境保全地域(サンタクルス特別保全地区)として手続きを開始したところから問題が発生してきたらしい。大農園によって土地が奪われるだけでなく、環境保全の名目によってこの地域の土地の囲い込みが始まったのである。

NGOは地域住民に近いか？

グアテマラの環境保全地区に関する行政は、政府機関であるCONAP(国家保全地域評議会)が、グアテマラの全保全地域で形成されるSIGAP(グアテマラ保全地域システム)の調整を行っているとなっている。SIGAPには、保全地域の管理に関わるすべての機関が参加するようになっている。自治体やNGOも参加している。つまり官と民の共同管理というようになってきているのである。コロン・飛びしてグアテマラでは、住民参加型の環境保全行政が確立している。などと考えるわけにはいかない。グアテマラという、階層民族で分断された社会ではNGO＝地域住民という構図は成立しない。NGOの構成員は多くの場合、都市のエリートなのである。隣接する「オニルセ東部に広がるサン・トル水源保護区」は実質的にFUNDACIONが管理しているような状態にあるがこの保護区の評議会のメンバーも政府関係者、地方自治体代表を除くと、林家と港湾(この水源に依存している)管理者だけなのである。地域住民は、決まったプランに参加させられるだけの存在に過ぎない。

しかし現在、少なくともSIGNGOの手で土

トウモロシ栽培

この地域では一家族あたり二〜四ヘクタール(約一四〜二八ヘクタール)のミルパ(トウモロシ畑)を作っている。収量は十五キントール〜二十キントール(約六百七十キロ〜九百キロ)年に二回耕作できるのでとりあえず食べていくには十分な量である。

このトウモロシ生産のために毎年新しく土地を開くわけではない。一年耕作するとその土地は一年休ませて敷(Guami)が茂ったりでまた耕作することになる。ある村での聞き取りによると七年くらいこの周期を繰り返すと新しい土地を開く必要があるという。

家族によってはフリホール・デ・アポーノ(肥料マメ)と呼ばれる緑肥(ハシシヨウマメ= Velvet Bean)を休閑期に利用している。十二月にグズのようなマメ科の植物に覆われた敷を刈り払って整地し、種子は適当にまき散らしておく。これで土が軟らかくなるのだという。有機物の供給、窒素固定、土壌の被覆による降雨・直射の緩衝などの役割を果たしていることが想定される。

地の測量が進められつつある。これは、支援組織の存在もあるが、また環境NGO自体も、地域住民に土地の所有権を認めていくこととしては、地域の環境保全が実現し得ないという視点に立つことになつたからである。欧米のNGOなどではこうした資金も提供するところが、日本ではあまりそうした資金を援助することは難しいように思う。

今年とりあえず「二〇のコミュニティ」がモデル的に境界線の確定を行い、登記を進めるといつ。しかしその後の展開には不透明さを残している。住民は登記をすませればNGOとは関係ない、す



プラングランデタティ村にて(2001.12.7)
緑肥に覆われた藪を刈り払い、次々モロコの播種に備える

べて自分たちの土地になる。その中で保護区と耕作適地の区分がどのようになるかはわからない、外部の誰かがそれを決めるのだらうと考えている。簡単にいつと登記させすませればもう自分たちの生活とは関係してこない、自分たちは「ウチロシ」を作って暮らしていけると考えているようである。しかし、科学的な「土地利用計画」では傾斜地にある耕作地が「耕作不適地」となれてしまつ可能性は大きい。自らこの利用区分を認めてしまつことになる。その後の利用に大きな制約が科される可能性もある。やはり、「知らないこと」に物事は進みさうである。

農民の未来はどのにあるのか

イサバル県では「ロック」による農民「コミュニティ」の組織化が急速に進みつつある。私たちが現在活動しているリビングストーンだけでも二五「コミュニティ」、イサバル湖の上流に位置する「ルナストール」では二〇以上の「コミュニティ」が「ロック」に参加している。そしてこのほとんどもすべの「コミュニティ」が土地の所有権を巡る問題を抱えており、その支援を求めて「ロック」に参加してきているのである。

これは、現在グアテマラ国内のNGOなども普及している技術でもあるが、扱いの容易さなどから農民自身が真似しつう広がってきたものが、再発見されていると考えていいのだらう。確証はないが、かつてイサバル県に大バナナ農園を有していた「ナイテット・フルーツ」が導入した技術であるといわれている。何にせよ、混作などではなく、休閑に利用するところがあまり手間がかからないことなどから、東部の低地では受け入れられている。(私自身十年ほど前に隣国ホンデュラスの農村で導入しようとして努めたこともあるが扱いがよくわからず…)

まずはこのように受け入れられている技術を確実に広めていくことが重要だらう。

セカリアスの文献では、「地域住民の大半が先住民族であるような保護区を管理するFUNDACIONのような環境保全機関の多くで、それらの執行委員は、非マヤの企業家、専門家、科学者だけで構成されているのである」と述べ、環境保全関係機関に先住民族の専門家、リーダーを入れることの重要性が提起されている。

La conservación de la naturaleza, el pueblo y movimiento maya, y la espiritualidad en Guatemala, Eduardo Secura, 2000



ルベルカカオ村のあ家で(2001/12/6)
毎日女性はトウモロコシを回しの手回しミルで挽き、
トリフィージを作る。手前は床に作られたマド

その背景には、この地域全体の非常に不明瞭な土地所有の状態と、ケクチの人々の中に高まるニーズがある。

農地改革で分配した後に再度奪われた土地や、実際に登記されている土地から大きく異なる大農園、あるいは登記などない不法占拠で形成された大農園、こつした土地に加え、どこにも登記されていないはずの「国有地」、農民たちが長年にわたって占有してきた土地などが複雑に入り組んでいる。その上に環境保全地域としての網がかかり、土地の所有権・利用権の問題は非常に複雑になっている。さらには、この地はマケル

や石油などの鉱物資源の利権も絡んでくるのである。

こつした中で、ケクチの人々は生きていくためには自分たちの土地を確保する必要がある、と考えている。今の土地をもつ奪われたくない。そして奪われたらこの先トウモロコシ畑を作る土地を得ることは難しいことも知っている。そのために土地を権利を獲得するために闘っているのである。

同時にこのことは、手にした土地で、生活を築き、子どもたちに土地を渡していく、ということの意味している。子どもたちが生きていけるように、トウモロコシを作り、生活していけるように土地を残すことはケクチの人々にとっても重要なことである。つまり、「持続的」であることは不可欠なのである。

その一方で、人々は新しい作物を作っていくたいと考えている。現金収入源となるような作物には関心を抱いている。しかし「コーヒー」もよく育たない、唐辛子もだめだ、昔アチョーテ実が赤の染料となるを作ったがもう売れない…、と人々は訴える。確かに、この地域は雨も多く、年間二五〇〇～三〇〇〇ミリ程度と思われる(適切な

作物の選択は難しいだろう。その上、道路からのアクセスも悪い。

これまで集めた情報の中では、まだまだこつした地域に適した確立したオータナティブというのはクアエマラにはないようだ。(しかしながら奔放な市場経済の中では、地域に適したオータナティブが経済的な持続性を保証されるかどうか、も定かではないが…)

私たちに何ができるのか

必要なことは、地域住民の様々な思いを形にしていって手助けをしていくことであろう。このままでは行き詰まる、こつした認識の上で、立ち上がってきた人々である。動き出す力を持っているのである。しかし、「土地獲得」という明確な目的の次にくる「コミュニティの未来」あるいは「開発」という話になると、その姿はぼやけてしまう。ましてや「環境保全」だ、「持続的開発」だとか言われても…、というところであろう。

そこでまずなし得ることは、村人たちがどのような方向を作っていくのか、議論をするための様々なオプションを提示し、考える手助けをするところであろう。情報収集をするところからコミュニティ

イーのリーダーたちを交流に出したり、村での動きの形成をサポートすることができただろう。

もう一つ重要なことは「行った活動を現地の組織を主体として行うことである。私たちレコムでは「ヨック」という農民組織を通じて活動を行っているが「われは、よそ者」の組織ではなく、農民たちが自ら参加して作っている組織であり、地域の人々にもっとも近い、信頼を勝ち得ている組織である。この「ヨック」を通じて活動していくことでよそ者の私たちが手を出すのではなく、地域のコミニティーのイニシアティブで動いていくことができると考えている。



最後にー環境保全との関わり

「この地域での活動を始めるにさいして、レコムでは「ヨック」との関係の中で、地域を選択してきた。「ヨック」に参加するコミニティーがあり、自分たちの未来に向けて何かをしていく」という動きがある。それがスタート地点であった。

その中で環境問題が大きなテーマとして浮上してきたのである。しかし別に環境NGOの問題が出てきたからといってそこを敵対しようと思っているわけではなく、関係を深めていくことは必要であるという、環境行政との関連も、もう少し調べる必要もあるだろう。

しかし「コミニティー」によって「環境保全地域」であることが「持続的」であることは不可欠である。そして地域の自然環境を人々の生活と切り離すこともできないのだ。

「環境保全との両立を目指す」と力を入れて押しつけるのではなく、ケクチの人々が自然とのような関係を築いてきたのかを学び、そして今後築いていくのか、ともに考えていければいいだろうと思いついてこの稿を終わりにしたい。まだまだ始まったばかりだし…

中米連続セミナー

4月13日(土) 報告:石川智子 グアテマラの先住民族女性は今何を目標しているか
5月11日(土) 報告:写真家 古谷桂信 「水と人の環境史」- グアテマラ・アティラン湖 -
詳細はレコムまでお問い合わせください